春来る鬼

須知徳平

春来る鬼
須知徳平
© Tokuhei Suchi 1989

講談社文庫
定価320円

1989年1月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願いいたします。 (庫一)

ISBN4-06-184395-8 (0)

講談社文庫

春来る鬼

須知徳平

目次

春来る鬼　七
三陸津波　八五
南部牛方節　一三九
山の伝説　一八五
あとがき　須知徳平　二〇〇
新版刊行にあたって　二〇二
「春来る鬼」の映画化　井上和男　二〇三
年譜　二一〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

春来る鬼

春来る鬼

ためし入り

三陸の海辺に住いする海人(あま)たちが、沖合を南下する冷たい海流を、その、くさぐさの獲(え)ものをもたらしてくれる恵みと、時には又、その、底に秘めた計り知れぬ怒りを畏(おそ)れて、「親」と呼び慣わすようになったのは、いつ頃からのことであろうか。

この、親潮と黒潮――正眼(まさめ)にも果てしない黒い流れの――と出会うあたり、海辺にそば立つ西の山並を、いかつい肩にして、海上に突出した左腕が、その先端を荒浪にえぐられて、鳥の嘴のようにとんがった、黒い岬があった。沖合に舟出する海人たちは、鬼の岬と呼んでいたが、そう言えば、外海から眺めると、浪間に半ば頭を没した、巨大な鬼の角のように見られなくもなかった。

潮も風も雲も、いまだ神の属性を失わず、その人格性を奪われることなく、人々の、きわめて身近な存在として、生きていた頃のことである。

東の空と、だだっ広い水際との落ち合うあたりが、白明によどんできた夜明方、この岬の突端に立って、ひょろ長い体を、潮風になぶられながら、昨夜の激しい時化(しけ)のなごりを、まだ身内一ぱいにふるわせていたひとりの男が、突然、息をのみ込むようにして、眼下の一点を凝視した。

ごうごうと、岩を噛んでのたうちまわる、うす墨色の浪間に、浮き沈みする、黒い影を見つけたのである。

水際のにぶい光が、急速に、うす墨をとかしはじめると、男は、怖れとも喜びともつかぬ叫び声をあげて、岬の元の方へ、よたよたと走り出した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「ゴロウがお出ったぞオ――ゴロウが流れてお出ったぞオ――」

＊

舟底板にしばりつけていた麻綱が、ずたずたに切りほどかれた。抱き合った二つの体は、乱暴に引離されると、砂辺に、鮭のように投げ出された。

二人ともほとんど丸裸のゴロウだった。海人たちは、流れついた死体をゴロウ（御霊）として喜ぶ。それは豊漁のきざしを占うものだったからだ。このゴロウは、股間のふんどしが大きく盛上った、たくましい男と、もう一人は、塩水に濡れた陰毛が、下腹の半ばまで、べったりとはい上り、太股も腹も、胸も、すき透るような白い肌の、若い女だった。

まわりにより固った、幾十もの貪欲な眼差の間から、突然声がおこった。

「――こりゃ、ゴロウでねえぞ……」

女の、豊な乳房の下に、痛々しく食込んだ二筋の綱目の跡に、うっすらと、血が浮んできたのである。

まわりのざわめきが、次第に荒くなった。

「手出しをするでねえ――」

きびしい声がとんだ。髭面の年寄りが、かがみ込んで、節くれだった手を、二人の胸に当てた。

「水を持って来い――」

口がこじ開けられて、運ばれた土がめの真水が、顔にぶっかけられた。髭面は、なおも、思案するふうに、男の瞼を開けてみたり、濡れた乳房に耳を当てがったりしていたが、

「一先ず、おれの小屋さつれてゆけ」

と、きびしい声で命じた。
やがて、二人の体は、さかさまにかつがれて、山際の、切株根に囲まれた、海人小屋に連れてゆかれた。
「お前らは、どこの者だ」
炉火に温くまされて、やっと正気づいた時、髭面は、最初にこうきいた。男は、まだ喉の底が、塩辛くつかえるのか、しゃがれ声で、
「北の浜の者でがんす」と答えた。
北の浜ときいて髭面が、急に硬くなった。
「お前の名は」
「さぶろうし……」
漁師は、一人前になると、呼名をつけられるならわしがあった。始終、耳をつんざく荒浪の上で仕事をするのだから、わかりやすい通り名が必要だった。顔形、体つき、性格、くせ、働き具合など、さまざまな要素が、呼名のもとになった。
さぶろうし、というのは、魴鮄に似た、それよりも一まわり大きな、深海魚の一種である。そう言えば、この男の、がっしりした四角い顔形も、赤銅色の肌合も、どこか、さぶろうしを思わせるところがあった。それとも、さぶろうしが棲んでいる深海にも、もぐることができるまで、息がつづく男だからだろうか。
髭面が、やっとほころんだ。
「おなごは」

「ゆの……」

傍の女が、蒼い顔を上げた。

うす汚ない海人小屋だった。炉辺には、食い残しの魚の骨や、器ものが散らばっている。他に誰もいない。髭面のひとり住いらしかった。土間の横木には、延縄や、突ン棒が、一ぱい立かけてある。突ン棒の穂先は、鋭くみがかれていた。それだけは、さぶろうしの眼にもわかった。この髭面は、漁にかけてはただ者ではない。

表戸が開いた。

「くっくねの爺イや、頭屋(とうや)さんが呼んでなさるど」

背の、やけにひょろ長い男だった。うしろから、幾人ものこり固った眼が、押し合いへし合いして、中をのぞいていた。ゆのは、髭面がひっかけてくれた腰ぴりの襟を合せて、乳房をちぢこめた。

「わかったじゃ、のっぺ——戸を閉めて帰れ」

髭面は、炉火の又木につるした、土鍋の稗(ひえ)がゆをかきまわした。ゆげのにおいが、空っ腹を刺した。二人は、もう二日も、何も食っていなかった。

さぶろうしとゆのが、さっぱ舟に乗って、北の浜を逃げ出したのは、たしか三日前の真夜中だった。時化に会った。櫂(かい)も食物も着物も、浪にさらわれてしまった。さっぱ舟も、隠れ岩にぶち割られてしまった。舟底板をはずして、体をしばりつけた。もう助からねえと覚悟した……。

「ここは、どこの浜でがんすべ」

「お前ら、知らねかったのか」

髭面はもう一度、念を押すようにきき返した。
「本当に、知らねえで流れてきたのか」
「へえ――」
本当に知らなかったのだ。喉の底がひからびて、耳の奥がざわざわなった。気がついたら、この板間にねかされていたのだ。
「ここは、岬の浜だ――」
「岬というと、――鬼の岬のこってがんすか」
と、思わずきき返した。
ゆのは、ふるえながら、さぶろうしに、にじり寄った。
二人は、何も鬼の岬を目指して逃げてきたのではなかった。そんなことを思いつく筈がなかった。北の浜の者らは、昔から、鬼の岬に近づくことを怖れている。第一、岬の裏側に、こんな入江があるとは、きいたこともなかったし、まして、人里があるなぞとは、思ってもみなかった。
「あとで、お前らを、頭屋のどこさ連れてゆかねばならねえ。それまで腹ごしらえをしておけ」
又木から土鍋が下ろされた。さぶろうしとゆのは、餓鬼のようにむしゃぶりついた。
「お前らは、運のええ奴だ。よく殺されねがったもんだ」
髭面が、ひとり言のように呟いた。
砂粒だらけの稗がゆが、喉の底にひっかかった。

＊

くっくねの爺イは、一足先に、頭屋屋敷に出かけていった。

さぶろうしとゆのは、のっぺに連れられて、表に出た。
いつの間にか、日射しは中空にくるめいていて、真向の岬の陰を、入江の海に、大きく落していた。
夜明方、この岬の沖で、荒浪に漂っていたさぶろうしとゆのをみつけたのは、その夜、ジャコミ（魚見）番に当っていた、この背高男の、のっぺだった。のっぺの知らせで、舟子頭のくっくねの爺イが、舟を出したのだ。
「お前らが、ゴロウでねがったもんで、おらひでえ目に会ってよ」と、歩きながら、のっぺが呟いた。
「そりゃ、何のこった」
「いや、何でもねえ……」
あわてて、長い首をすくめて、
「頭屋屋敷は、こっちの方だがや」
岬よりの、くっくねの小屋から、右手に、山際伝いの道をゆくと、軒を接した幾十もの海人小屋が立並んでいた。途々、海人小屋の戸が開けられて、村人らが、後から、ぞろぞろついてきた。
――ゴロウのなり損いだ。
――他所者だ。
顔を寄せて、口々にささやき合い、まるで仕置場に連れてゆかれる罪人を送るような、眼付だった。

「何も気にすることはねえ、頭屋さんの調べがすむまでは、誰も手出しは出来ねえからなや」と、のっぺが言ったが、家を出る前の、くっくねといい、のっぺといい、気にかかる言葉だった。

軒並の海人小屋を通り過ぎると、西の山の谷間に沿って、石ころだらけの坂道にかかった。村人らは、どこまでもついてくる。

坂道を登りつめると、山腹の高台になった。

一面に赤松の林が拓けて、その中に、頭屋屋敷があった。根太の高い、砦のような古い造りで、軒廂が、さっぱ舟をかくすほども深く、土台石や、屋根石には、青苔までむしている。途中の海人小屋が、うす汚ないけもの小屋みたいなものばかりだったので、こんなところに、こんな豪勢な屋敷があるとは、思いがけなかった。

「ここに坐って待ってろや」

さぶろうしとゆのは、湿っぽい土間の上に坐らせられた。うしろからついてきた村人らは、てんでにあぐらをかいたり、立膝をしたり、二人のまわりを、ぐるっと、とりまいた。

松林と、深い軒廂に、日射しはさえぎられ、屋敷の中は、がらんとしてうす暗かった。土間から、半間ほどの高さの板間の上に、五枚の丸莫蓙が敷かれてあった。その奥は、三方厚い板襖でしきられている。うしろの、村人らのざわめきがするだけで、屋敷内は、物音一つしなかった。さぶろうしは、眼をつむった。調べということだが、これから一体、何を調べられるのか、不吉な予感が、冷たく、背すじを走ってきた。

うしろのざわめきが、急にしずまった。眼を開いた。正面の襖戸が、音もなく開いて、しきい

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com